法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

イギリス軍艦「イカルス」号水夫暗殺一件

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

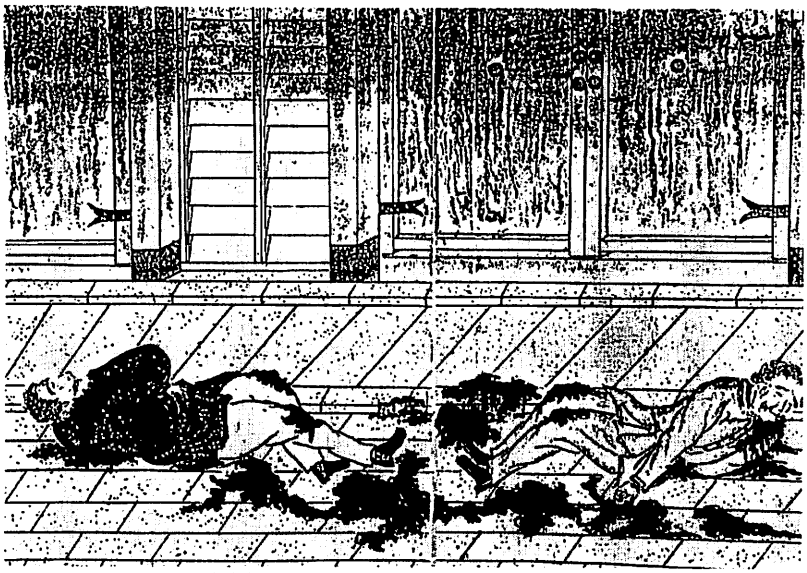
(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
42
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
95
(終了ページ / End Page)
112
(発行年 / Year)
1995-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007293

イギリス軍艦「イカルス」号水夫暗殺一件

宮永　孝

開国後、主としてわが国の開港場を中心に多発した外国人に対するテロ行為は、偏狭な考えをもつ一部の日本人（その多くは浪士）らが、国家擁護と外国の圧迫に対する敵がい心に目覚めた結果、衝動的もしくは計画的に起こしたものである。が、本稿で取り上げる事件は、排外思想が動因というより、個人的な利己主義に基づくもので、動機がきわめて不明確なものであった。長崎におけるテロの最初の犠牲者は、文久元年七月十八日（一八六一・八・二三）の夜、丸山の歓楽街で酔ったあげく町人とけんかして撲殺されたチャールズ・コリンズ（英艦「オーディン」号の機関員、二十七歳）である。次いで文久三（一八六三）年の初頭に、商人チャールズ・サットン（荷役および元請業、二十四歳）が大浦で何者かによって斬られ重傷を負った。さらに慶応三年五月十二日（一八六七・六・一四）ジョージ・バンカー（米船「ヴァレッタ」号乗組員、二十八歳）が、背後から斬られ死亡する事件が起こり、同年こんどは英艦「イカルス」号の水夫が殺されるといった事件が続発した。本稿はこの後者の事件について綴ったものである。

長崎に住む英米人から「領事館の丘（カンスレット・ヒル）」として親しまれている東山手居留地に、イギリス領事館がある。慶応三年七月七日（一八六七・八・六）の朝六時ごろのことである。領事館に勤務する警官トーマス・アンダーウッドの所に、奉行所の役人（定役）がやって来て、「山（ヤマ）（丸山――長崎市内の旧歓楽街）で外国人が二人殺されたが、どこの国の者かわからない」といった。[1] アンダーウッド巡査は、この変事を聞くと直ちに奉行所に出向きいろいろ問い質した



長崎丸山で殺傷されたイギリス人水夫の図
左はジョン・ハッチングズ（23歳），右はロバート・フォウド（28歳）

後、死体が置かれている丸山の茶屋（ティー・ハウス）（寄合町の引田屋政之丞方）に赴いた。死体は店の門の奥に横たわっており、そのそばに水兵の帽子が転っていた。帽子の内側には"Icarus"（「イカルス」）という艦名が付いていた。また青い綿ネルと日本人が用いる懐紙が落ちていた。被害者の身元が判明したので、アンダーウッド巡査は停泊中のイカルス号を訪ね、乗組員が不慮の死をとげたことを知らせた。

日本側の史料には、殺されたイカルス号の二人のイギリス人水夫の名前は出てこないが、長崎のイギリス領事館の報告書[2]には氏名が明記されている。犠牲者は――、

ロバート・フォウド Robert Foad（二十八歳）……火夫（ストカー）。

ジョン・ハッチングズ John Hutchings（二十三歳）……大工（カーペンター）である。

この二人は誰の手にかかり、どのような殺され方をしたのか。開港後、下松川（大浦川）の河畔に外国人用の酒場[3]ができる前、外国船の乗組員の大半は、昔からある

長崎の歓楽街（丸山）へ出かけ、たのしむのが一般的であった。フォウドとハッチングズもご多分にもれず泥酔したあげく、茶屋の前の通りで寝込んでしまい、そのとき通りすがりの何者かによって斬られたものである。

長崎奉行所の俗事方・桐山子之助が、寄合町の町役人から来た書状によって事件を知ったのは、七月七日（八・六）の七ッ半（午前四時半）ごろである。異変に接した奉行所からも直ちに公事方掛（裁判関係をつかさどる）の定役と属吏らが出張し、犯人の探索と聞き込みを開始した。前夜の色町の情況はといえば、イギリス軍艦の水夫らしい者が大勢街中を徘徊していたらしく、衣服等から犠牲者はイギリス人ではないか、と考えた役人らは、定役をイギリス領事館に遣り、貴国の艦の水夫らしい者が二人殺された、と報告させた。犠牲者らの遺体が引き取られる前に死体の見分が行なわれた。日本側の所見では、「壹人は左肩先ゟ右脇之下に懸胸上筋違ニ九寸（約二十八センチ）程、壹人は右肩下ゟ左脇之下へ懸同様八寸（約二十五センチ）程、いつれも深疵壹ケ所」（「英水夫殺害一件手続」）とある。が、イカルス号の軍医ヒューストン・マックスウェルの検死報告は、これよりもややくわしい。その大要を記すと、ロバート・フォウド……左わき下より胸部の左側にかけて創傷。左の鎖骨（胸部と肩をつなぐ骨）は関節のあたりで切断。創傷はさらに右の鎖骨の軟体部分にまで達している。この傷は、のど笛や食道および首の右側の大動脈や血管を切断し、脊柱まで深く喰い込んでいる。

ジョン・ハッチングズ……右の肩の継ぎ目よりのど笛まで、長さ八インチ（約二十四センチ）の創傷。三角筋、上腕骨、鎖骨を切断。軍医のマックスウェルは、両人の死体を見分した結果、「何か鋭い武器、おそらく日本刀か何かによって」殺[4]められたものと推断した。また傷口や死体の状態から、斬殺されたのは、午後九時から十時にかけての間である、と考えた。そして死因審問（コロナーズ・インクエスト）の結論を次のように出した。

イギリス艦イカルス号の死亡した二人の水夫、すなわちロバート・フォウドとジョン・ハッチングズは、本月五日の夜から六日の朝にかけて、山と呼ばれる日本人街の一部にある茶屋の前で、惨殺死体で発見された。検死陪審の意見では、二人が死に至った傷は、どこのだれとも知れぬ一人又は複数の人間の日本刀によって加えられたものである。同時に、陪審団は、武器をもった日本人が、広く外国人に対して犯す、たび重なる残虐なる殺人事件に嫌悪と不快の念を覚える、といいたい。長崎ではこの種の犯罪が増加しつつあるので、陪審団としては、条約港の遊歩区域では、政府の役人が武器を携帯できるのは勤務中にかぎるといった措置をとることを勧める。

（署名）マーカス・フラワーズ
（領事代理、検死陪審員）
（署名）サミュエル・モルトビィ
（署名）M・R・M・グリフィス
（海軍中尉）
（署名）B・レインボウ

陪審員

事件の捜査は、日本側の役人によって、まず目撃者の証言や当夜の街の状況などを把握することから始められた。まず二人が艦から上陸したとき最初に会ったと考えられる日本人の客引き（岩助）の証言から聞いてみよう。

――六日（八・五）の夜九ッ（午後零時）ごろ、大浦（長崎港の東岸）でイギリス軍艦の水夫らしき者二人から案内を頼まれましたので、両人を寄合町の引田屋（遊女屋、政之丞宅）に連れて行きました。うち一人は、用事があるので帰りたいというので大浦の居留地まで送り届けました。そして再び寄合町にもどる途中、引田屋の前の往来で、外国の水夫らしい者が二人倒れておりました。二人は酔い潰れているように見うけられました。通行のじゃまになり、万一事故が起こってはまずい、と思い、引田屋の軒下に引き寄せました。そばに帽子が二つ、黒さるまた又は股引

（ズボンのことか――引用者）が一つ、手ぬぐいが一つ、落ちておりましたので、それらを水夫たちのそばに置きました。引田屋の下男三九郎という者が提灯をもって店から出て来て、立ちどまっている間、同人と話をしました。そのとき同じく引田屋の下女ふじという者が、木戸口（通路に木で作った出入口）から三九郎を呼び寄せ、買物をいいつけました。

同人がその場を立ち去ってからも、往来にたたずんでおりますと、白木綿の筒袖（たもとがなく、筒のような形をした袖のついた着物）と袴を着用した侍が十二、三人やって来ました。かれらは酔っており、中には唐詩などを吟じておる者もおりました。山手のほうにゆっくり歩いてゆくとき、うしろの方で物音がしたので振り返りますと、抜き身の侍が三人駆け上って来ました。私はこわくなったので、近くのそば売りの屋台の蔭に身をかくしました。そして様子をうかがっていると、三人のうちの一人が抜刀のまま小島のほうに去って行きました。私はそれより新道より逃げ出、船大工町から外廻りし、再び寄合町に戻ってまいりました。筑後屋のすが方で休んでおりますと、朝八ッ（午前二時）ごろ、町役場より呼び出しを受けましたので、出頭し、陳述いたしました（「英水夫殺害一件引合之もの紀書」）。

岩助は、イギリス領事館員からも事情聴取をうけたようで、その証言の英訳[5]が残されている。それによると、岩助は外国人を遊女屋に案内することを生業とし、事件が起った夜は、何人かの水夫を入江（大浦川か？）のそばの酒場に案内してから、山へ連れて行った、という。その他の証言内容は、先に引いた日本側の証言記録とほぼ同じである。岩助は文字に暗かったものか、証言の英訳の署名欄には×だけが付いている。酔いつぶれ、往来で寝ていた水夫のかたわらで、岩助と話をした引田屋の下男三九郎は、どのような証言をしているか、次に引いてみよう。

――六日の夜、九ッごろ、仕事をおえ台所で涼んでおりましたら、店の前の往来で外国人が寝ているので、かれら

の目がさめるまで見守っているよう、主人政之丞からいいつかりました。そこで提灯を持ち出し、番をしておりますと、かねて顔見知りの外国人の道案内をやっております、岩助がやってまいりましたので、この者と一緒に外国人の番をいたしました。やがて下女のふじが出て来、薬用にしたいから焼酎を買って来てくれないか、といいました。酒屋まで行きましたが、店はとっくに閉っており、求めることができず、空しく立ち帰り、ふじにその旨を伝えました。岩助が外国人の番をしていたので、別段見守る必要はなかろう、と思い、店に引き上げ、自分の部屋で休みました。その後のことは存じません。

日本の役人に語った証言がこれだが、イギリス領事館員にした供述とは、やや内容が異なる。

——月曜日（八・五——引用者）の夜、下女のふじから酒を買いに遣られました。午前一時ごろのことです。外国人が殺されたことは知りませんでした。人殺しのことは聞きませんでした。門の所で番をしておりましたが、往来を通ったり、そこで寝ている外国人を見ておりません。たいてい私は門の内側で腰をおろしております。当夜の情況については何も存じません。酒を買いに出、戻ったとき、誰も往来で寝てはいなかったし、ましてや死人も見ませんでした。そのとき通りには日本人はおりませんでした（傍点は、日本側の証言記録と食い違う——引用者）。

三九郎はなぜこのような供述をしたのであろうか。事件の巻き添えをくうのを恐れるあまりあえて虚言をついたものか。次は三九郎に外国人の番をすることを命じた、主人政之丞の証言である。

——義父の政右衛門が重病であり、その看病をしておりました。が、六日の夜四ッ半（午後十時半）ごろ、拙宅前の往来で外国人が二人寝ておりました。この二人を見ようと野次馬が押しかけ、通りが混雑してはまずいと思い、下男の三九郎に命じまして、外国人の番をさせました。同夜九ッ（午後零時）を過ぎても寝ておりました。が、翌日の八ッ（午前二時）ごろ、下女のふじに呼び起されました。拙宅前で外国人二人が殺されている、と通行人から知らせ

があったといいます。それを聞いて、私はたいへん驚きました。とりあえず裏口を出て町役場へ届けに行きました。事件の前後のことは一切存じません。

次に引くものは、イギリス領事館文書に見られる同人の簡単な供述である。

「店の門外の路上で寝ている外国人の番をさせました。門口の所に行き、二人の外国人のことを指差しませんでした。私は表にいる外国人を二人見ただけです」。このあと下男の三九郎は、主人の政之丞と会うと、門外の往来に二人の外国人が寝ていたことを認め、また午前一時すぎに床についた、ともいった。三九郎は奉行所で尋問されたのであるが、そのときのかれの供述はつじつまの合わないもので、矛盾したことをいった、とある。

引田屋の下女ふじの証言はどうか、次に聞いてみよう。彼女こそ、一番先にイギリス水夫が殺されたことの通報に接した、当人である。

——六日の夜、台所とその他の用事をすませ、九ッごろになった時、薬用の焼酎を買い求めたいと思い、下男の三九郎さんの所に行きましたら、同人は主人政之丞の言いつけで店の前の路上で寝ている外国人の番をしておりました。三九郎さんに酒を買いに行って欲しい、と思いまして、表戸を開けますと、外国人らしき者が二人、通りの片すみで横になっておりました。そのそばに知り合いの岩助さんと三九郎さんがおりました。三九郎さんに焼酎を買いに行ってもらっている間に、岩助さんとよもやまの話をしました。そのうちに三九郎さんが戻りましたが、酒は買えなかったということでしたので、共に店の中に入り、めいめいの部屋で休みました。八ッごろのことでしょうか、お宅の前で血だらけの外国人が二人死んでいるよ、と通行人が教えてくれましたので、早速主人にその旨伝えました。その他のことは一切存じ上げません。

次に引くのはイギリス領事館文書にみられる彼女の供述である。日本側の記録にある叙述とやや趣を異にしてお

り、死体発見に至る経緯がよくわかる。

——私は生きた状態のときの水夫二人の姿を見てはおりません。騒ぎを耳にしましたのは、午前二時ごろのことです。窓のそばで寝ておりました。何人かの日本人が通りすぎたかと思ったら突然立ちどまり、「この外国人は死んでいるぞ。見ろや血が流れている」と叫ぶのが聞えました。私は死体を見てはおりません。店の者がこのことを役人まで届けました。店の表口は開いてはおりませんでした。その者は裏木戸から外に出ました。表口は朝何時に開いたのか存じません。門内にある刀傷は、祭の最中につけられたものです。

次に引くのはグラバー商会に勤める日本人キタロー（不詳、召使い）の証言である。

——私は月曜日（八・五——引用者）の夜、キングズさんと外出し、山を登っておりますと、茶屋の表の通りで、外国人が二人寝ているのを見ました。一人はあお向けに寝ており、もう一人は横になって寝ておりました。二人は軍艦の乗組員であることがわかりました。白いズボンをはき、黒っぽい上着のようなものを着ておりました。血のようなものは見かけませんでした。帰途につくときも、両人は同じ姿勢で寝ておりました。通りには役人の姿はありませんでした。私が申し上げることのできる情報はこれだけです。

またキタローと同じグラバー商会に勤務するキングズの証言はこうである。

——月曜日の夜、十時から十一時にかけて、友人（キタロー——引用者）と共に山に行きました。白い服を着た外国の水夫が二人、通りで寝そべっているのを目撃しました。通りを登って行くと、そこに寝ておりました。帰宅する十一時ごろ、まだ同じ場所におりました。血を見てはおりません。まだ寝ているものと思いました。両人は軍艦の乗組員かどうかわかりませんでした。登って来た通りを下るときも、二人は同じ姿勢で寝そべっておりました。白い着物を着た日本人を往来で見ておりません。

イカルス号の乗組員の中にもフォウドやハッチングズを陸(おか)で見た者がいるが、次にその目撃談を引いてみよう。エドワード・フィールド（一等兵）の証言はこうである。

——十一時半にハッチングズとフォウドの姿を茶屋がある通りで見かけました。その後、私は帰艦いたしました。二人を最後に見たとき、二人とも傷を受けてはおりませんでした。私たちは茶屋にいたのです。二人を最後に見たとき、両人はしらふでした。ハッチングズにはいくぶん浮れ騒ぐところがありますが、けんかを好みません。

チャールズ・ドリスコル（火器係）はまた、次のように証言している。

——死体が発見された所から四軒先の茶屋がちょうど二人を見た最後の場所ですが、私は十時から十一時の間にハッチングズとフォウドに会いました。二人ともしらふでした。二階の部屋で寝ているフォウドを見ました。その後、かれを見ておりません。階段の所でハッチングズと会いましたが、再び見ることはありませんでした。午前五時前に二人が殺された店の前を通りました。けんか騒ぎでもあれば、その現場に行ったでしょうが、人殺しがあったことは知りませんでした。店の前の通りは、洗い流されておりました（傍点引用者）[6]。

事件当夜、引田屋の日本人客は八名、外国人は一人もいなかった。殺人が明るみになり役人が来てから、二人の死体はこの遊女屋の門内に入れられた。日本人およびイギリス人の証言から考えられるのは、ロバート・フォウドとジョン・ハッチングズら両名は、慶応三年七月六日（一八六七・八・五）の夜九時ごろ上陸し、売淫手引人（日本人某）と会い、その者の案内で丸山に出かけ、引田屋から四、五軒先の遊女屋に登楼した。二人は〝ちょんの間遊び〟のつもりで店に入ったもののようだが、しらふであった。イカルス号の火器係チャールズ・ドリスコルは、両人を遊女屋の中で目撃している。かれが二人を見たのは、既述のように午後十時から十一時の間であったという。

問題はその後のフォウドとハッチングズの足取りである。二人は妓女の部屋に入るまでしらふであった。部屋の中

で酒を飲んだものかどうかは何ともいえない。遊女の証言が無いからである。が、日本酒か焼酎のようなものを飲まされたと考えてよかろう。その後二人は、店の外に出、引田屋の前あたりまで来たとき、酔いが回り路上で寝そべってしまった。午後十一時から十二時ごろのことである。このとき二人はまだ生きていた。けれど午後十二時から翌日の午前二時までの間に何者かに刀で斬られ、命を落とした。

いったいこの二人を殺した犯人は誰であったのか。訊問においても証人はめいめい勝手気ままな供述をするだけで、犯人の捜索は遅々として進まなかった。運悪くイギリス水夫らが殺された場所を通った土佐海援隊の者が嫌疑をうけた。折から長崎港に停泊中の土佐藩の横笛丸・南海丸の二船が、凶行数時間後の未明に出港したことから、これらの船のどれかに犯人の何人かを移し脱出させたのではないか、とイギリス側ばかりか幕府も疑った。[7] [8] 初代イギリス公使オールコックの後任として来日し、高圧的な外交を行なうことで知られたハリー・スミス・パークス（一八二八～一八八五、一八六五～一八八三在任）は、イカルス号の水夫殺害事件にひじょうに激昂（げっこう）し、老中板倉勝静（かつきよ）に強硬な申し入れをした。幕府は外国奉行平山図書頭・大目付戸川伊豆守・御目付設楽岩次郎らを軍艦回天丸で高知に遣り、容堂侯と会談させ、さらに長崎において取調べを続行させた。

一方、招待旅行とこの事件の犯人の究明をかねて、イギリス公使館の一行（パークス公使、A・B・ミットフォード、W・G・アストン、E・サトウ等）もイギリス軍艦で阿波・土佐・長崎へ赴いた。

高知における容堂侯との会談では、もし加害者が土佐人であれば、逮捕のうえ処罰するし、犯人が他藩の者であっても探索を手加減しない、との言質を取った。パークスらは長崎滞在中、領事代理マーカス・フラワーズの家に宿泊し、各藩の知友と会ったり、土佐藩と事件との関連について調査するのであるが、決定的な証拠は何一つなく、証拠不十分をもって長崎を引きあげ、江戸に戻った。幕府は長崎の二奉行（能勢大隅守、徳永石見守）を解任した上で、

この種の事件の再発を防ぐために江戸から派遣する兵五百名をもって居留地を巡回させることを約束し、パークスを納得させ、[9]本件を終わらせた。

この丸山の変事は、当時長崎の町を騒然とさせたものと思われる。当夜、事件の突発が港内の外国軍艦（アメリカ、プロシア、イギリス、フランス）にも伝わるや、水兵は上陸し、市中に配置され、警戒にあたったらしく、また長崎奉行徳永岩見守は、各藩邸内にいる藩士や諸役人の素行調査を行ない、さらに丸山廓内の茶屋、市中の旅宿を取り調べ、そこに出入りする藩士の行動を監視したが、[10]犯人を挙げられなかった。そして土佐の二船が港外に出たことが紛糾の種となった。

イカルス号の水夫二名を殺害した福岡藩士金子才吉の肖像写真

長崎奉行所が必死に犯人の探索に努めた結果、情況証拠から、この事件は真夜中すぎに「白い着物」を着た者の仕業らしいことが判明した以外、犯人についてはようとして消息を聞かなかった。この事件はやがて維新のどさくさで迷宮入りとなるかと思われた。しかし、明治元年二月（一八六八・三）堺事件（土佐藩兵がフランス軍艦の乗組員を殺傷）が生じたとき、パークスはこの事件に関連して、前年の丸山の事変のことを持ち出したため、新政府も苦境に陥り、これまであいまいであったこの一件を氷解なさしめることにし、大隅八太郎（重信）を長崎に派遣した。

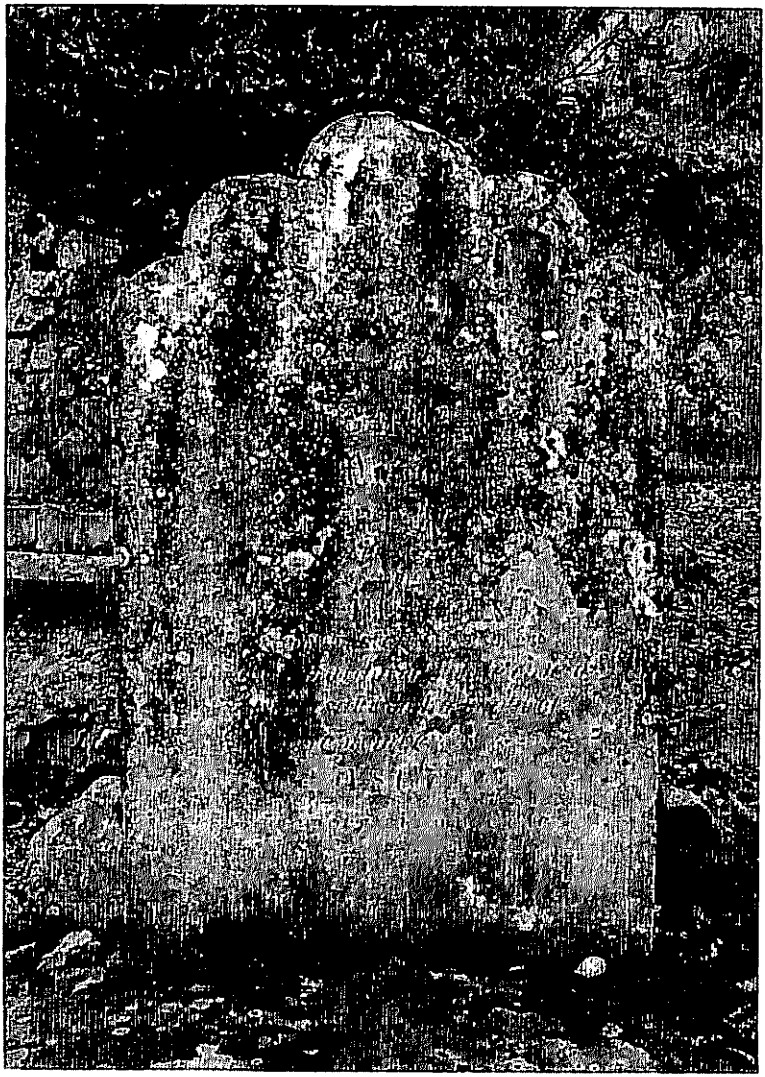
慶応四年九月七日（一八六八・一〇・二二）立山役所において、大隅八太郎・楠本平之允（正隆、当時長崎裁判所権判事）・吉井源馬・林亀吉（土佐藩大目付）らが参会し、犯人捜索について相談し、その後八方に手を廻して犯人逮捕の糸口を得ようとしたが思わしくなかった。しかし、ふとしたことから事件解決の端緒が開けた。林亀吉は長崎に来てから書生を雇い置いていたが、その者が「加害者を知っています、何でも筑前藩の者です」といったことから、その旨を長崎府知事沢宣嘉（一八三三～七三、幕末・維新期の公卿）に申し出た。かくして沢知事は、筑前藩の聞役（外敵などの急を知らせる役）栗田貢[11]を呼び出し、取り調べを命じた。同人は突然の話に狼狽し、藩庁に報告すると、藩としても包み隠すことができず、ついにじつは弊藩の金子才吉という者の仕業です、と白状した。同人はすでに切腹して果てたので、この一件に関しては連係者が自首するということにし、ひとまず落着した。[12]

ここにおいて金子才吉という名前が犯人として浮上したが、かれは一体いかなる人物であったのか。金子は筑前藩家老矢野梅庵の陪臣徳田文右衛門の次男として文政九（一八二六）年に生まれ、のち浮組金子氏を嗣いだ。和漢洋の造詣が深く、事件当時、藩の伝習生の一人として航海・測量術を学ぶ俊才であった。そのかれがなぜイギリス人水夫を殺さねばならなかったのか。事件当夜の七月六日（八・五）は、七夕の祭でありひじょうに蒸し暑く、伝習生（村上、水谷、村沢、讃井、田原、栗野）らは外に涼みに出かけ、丸山付近まで散歩した。金子も隣部屋の富永と、あとから六名の仲間の跡について外出した。一行八名は丸山廓に入り、寄合町まで来たときである。とある茶屋（引田屋）の門前の路上で外国人らしい者が二人酔いつぶれて寝ているのを、提灯の明かりで照らして認めた。そのときである、何を思ったか、金子は刀を抜くと、二人の肩先めがけて斬りつけた。そばにいた仲間は、この刹那の兇行にびっくりしたが、どうしようもなく、その場を去り五島町の宿舎（播磨屋敷）に帰った。午前二時ごろのことである。けれど金子は、そのあと山に上って行ったきり帰らず、翌七日（八・六）の午後になって、人夫体の者が富永の

もとへ手札（名刺）を持ってやって来た。それには迎えに来てくれ、といった金子の伝言が書いてあった。富永は、金子が前夜より何も口に入れず空腹でいると思って巻き鮨を求めると、すぐに同人が身を潜めている戸町屠殺場の近くの薪の置き場所に出かけた。ところが金子は、その鮨を食べず、薪の積み上げてある山を捕手とみなすほど、精神が錯乱していた。富永は播磨屋敷に戻るよう説得したが、相手はそれを聞き入れようとはせず、砲台番の詰所に行くのだ、といい、一緒に丘陵にある測量部の海岸まで来たとき、某がいるかどうか調べて来てくれといった。富永は丘に上り、在不在をたしかめて下って来ると、金子は船を漕ぎ出し、逃走したあとであった。そこで大声を出し、船を呼び戻そうとしたが応じず、やむなく帰宿の上、この始末を聞役栗田貢に報告した。ところが、同日の午後八時ごろ、金子はひょっこり播磨屋敷に戻って来た。聞役は同人をここに留め置いては面倒が生じると思い、水の浦の本藩屯営所に送り、気分を落ちつかせるため座敷に入れ、役所書記仙田文次郎に命じ監視させた。

八日（八・七）の深夜のことである、金子は仙田の刀かけより大刀を奪いとると、それでもって腕をかき切ったが死に切れず、ついには喉を突いて自殺した。享年四十二歳であった。金子の遺骸は丸棺の中に入れられ、三日目の慶応三年七月十一日（一八六七・八・一〇）ごろ、藩船蒼準丸に載せて福岡港に運び、福岡城南茶園谷長栄寺に埋葬した。墓碑に「戒名秋嶺院釋秀菡居士」とあるという。[13]

ところでイギリス人水夫らを斬殺した理由だが、それは今も必ずしも明らかでない。金子は洋学修業として航海・測量術を学んでいた折、西泊砲台の建設ならびに港内測量の必要が生じた。かれは気分不揃となり、ついに精神に異常をきたした。丸山の事件はかれの発狂に原因があったようである。[14] また事件当夜、英学修業中の栗野慎一郎（のち駐露特命全権大使、子爵）は、事の次第を内々で聞役栗田貢に知らせたが、同人はこれを不問にし、あまつさえ箝口令をしいた。その後事件が発覚すると、栗野と七名の伝習生は自訴し、審問終了後は東京に護送され、士道に背き、



長崎の「大浦国際墓地」にあるイギリス水夫ジョン・ハッチングズと
ロバート・フォウドの墓（合碑）
（筆者撮影）

友誼を失した科で禁錮刑（二カ月半の牢屋入り）を申し渡された（「太政官日誌」明治二年第九号）[15]。また福岡藩知事は蟄居を申し渡された上、殺されたフォウドとハッチングズ両人の遺族に償金を支払うよう命じられた。しかし、新政府によるこれらの懲罰は秘かに行なわれたもので、パークスがそのことを知ったのは『官報』によってであった。パークスはつんぼさじきに置かれていたことに激怒し、政府に強く抗議するとともに謝罪を求めた。新政府はその非を認め、失策の償いをする、とパークスにいった。パークスが求めたものは、五ケ条から成るが、その要点を述べると、本件の議事録と判決の提出、将来、再審理を行なうとき公使館員を立ち合わせること、福岡藩知事の謝罪文、要求があれば同藩の囚人との面会を許可すること等である[16]。

かくして土佐藩の冤罪は、真犯人が筑前藩士であったことが判明したおかげで、ようやく晴れたのである。ロバート・フォウドとジョン・ハッチングズの墓は、長崎の「大浦国際墓地」（九十三番地）にある。合碑であり、墓石の表面にみごとな刻字が見られるが、その半分近くは風化により読み取れなくなっている。

〔……〕
BY〔……〕
〔……〕S AND〔……〕
H.M.S ICARUS
Memory of
ROBERT FOAD
〔……〕ER AGED〔……〕
AND

JOHN HUTCHINGS
〔……〕 AGED 23
〔……〕 *murdered while* 〔……〕
Nagasaki on the night of
September 5
1867
Remember all must die.

注＝〔……〕は判読できない。

（イギリス軍艦イカルス号〔……〕ロバート・フォウド、享年〔……〕とジョン・ハッチングズ、享年二十三歳の御霊に献ぐ。一八六七年九月五日の夜、長崎において殺される。人はすべて死ぬ運命にあることを想起すべし。）

英艦「イカルス」号の水夫殺害に関する日本側史料としては、「暴行門　殺傷　英軍艦水夫両人長崎ニ於テ遭害一件㈠～㈨」（『続通信全覧　類聚之部　三四』雄松堂出版　昭和62・9）がいちばんくわしく、その他雑誌『江戸』（第四巻第二綴～第五巻第一綴）に載った「英国軍艦エカルス水兵殺害事件（其一）～（其四終）」（大正5・8～11）、『大日本外交文書　第四巻』所収の「長崎ニ於ケル英国軍艦水夫殺害事件」、「英人暗殺事件」（『大隈伯昔日譚二』所収、続日本史籍協会叢書　昭和56・4）、新聞記事としては「英国水夫暗殺事件」（明治元・10、『崎陽雑報』㈣、『新聞集成明治編年史　第一巻』所収）などがある。またイギリス水夫両人を殺した犯人の金子才吉に関する伝記的研究としては、大熊浅次郎の「幕末福岡藩の偉才金子才吉事蹟㈠㈡㈢」（大正13・6～8、『筑紫史談　第三十～三十二集』所収、福岡県立図書館蔵）が最もすぐれており、参考とすべき点が多い。

外国側史料としては、Francis Ottiwell Adams, F.R.G.S. 著 The History of Japan vol.II.－1865 to 1871,

Henry S.King & Co., London, 1875 の第十三章に五頁ほど小記事がみられる。これも二次資料としていろいろ参考となるが、今回新史料として利用したのは、アメリカ公使館文書（マイクロフィルム）[Paper relating to Foreign Affairs, accompanying the annual message of the President to the Second session fortieth Congress. Part II. Washington, Government Printing Office, 1868] と長崎のイギリス領事館文書（マイクロフィルム）[No. 43, British Consulate, Nagasaki, Aug.10th 1867, to Sir Harry Parkes] である。とくに後者は量的に多くはないが、日本側史料に見られぬものも収めてあり、この事件を別な角度から照射している。本稿の執筆に際して、早稲田大学中央図書館、東京大学史料編纂所、長崎県立図書館、福岡県立図書館等のお世話になりました。記して謝意を表します。

注

（1）No.43, British Consulate, Nagasaki, Aug. 10th 1867, to Sir Harry Parkes.

（2）同右。

（3）レイン・アーンズ ブライアン・パークリガフ『時の流れを超え――長崎国際墓地に眠る人々』（長崎文献社、平成三年七月）の二四頁。

（4）注（1）に同じ。

（5）同右。

（6）注（1）に同じ。

（7）アーネスト・サトウ 坂田精一『一外交官の見た明治維新（下）』（岩波書店、昭和五十年六月）の三七頁。

（8）「英国軍艦エカルス水夫殺害事件」

（9）注（7）に同じ。

（10）大熊浅次郎「幕末福岡藩の偉材　金子才吉事蹟（上）（中）」（『筑紫史談』所収）を参照。

(11) 同右の二二頁。
(12) 注(11)に同じ。
(13) 注(10)の三二頁。
(14) 注(10)を参照。
(15) Francis Ottiwell Adams,F.R.G.S.:The History of Japan,vol.II の七〇～七一頁。および「太政官日誌」(明治二年第九号)を参照。
(16) 注(15) F.O.Adams 著の七〇～七一頁。

〔追記〕本稿は平成五年度法政大学特別研究助成金による成果報告の一部である。